

《原著論文》

無気力傾向尺度の再検討

Re-examination of the Enervation-in-Campus-Life Scale

岸 可奈子 諸 井 克 英*
(Kanako KISHI) (Katsuhide MOROI)

Abstract : The present study reexamined the factor structure of enervation in female undergraduates. Enervation-in-Campus-Life Scale (fifty items which were chosen from scale items developed by Moroi *et al.*, 2009) was administered to female undergraduates ($N = 256$). This scale was shown to consist of seven factors. The secondary principal component analysis was executed. The primary factors and secondary components obtained in those analyses were similar to the previous results (Moroi *et al.*, 2009). The significance of research on students' enervation was discussed in the family experiences context.

Key words : enervation, apathy, adolescence

I. 問 題

青年期は、「子どもから大人への過渡期」という境界人的存在であり (Lewin, 1951), 社会的責任や義務の決済を猶予期間すなわち「モラトリアム」(Erikson, 1959) として特徴づけられる。この青年期の存在を支える高等教育の充実、わが国では頂点を極めている。つまり、2010 年 4 月の大学進学率は 50.9% に達し、過去最高となった (文部科学省, 2010)。女子だけでも 45.2% である (男子 56.4%)。

しかしながら、この「外形的」成功は、社会参加のための準備期間として近代が生み出した青年期の意義に相反する現象を伴う。'60 年代中半以降の大学進学率の上昇によって、大学が「エリート段階」から「マス段階」へと変貌したのである (竹内, 2003)。大学に対する「教養知」と「専門知」の幻想が崩壊し、大学の「レジャーランド」傾向が顕在化した。

この「マス段階」の心理的側面として、アパシーすな

わち無気力で意欲がなく、物事に無感動、無関心で、無為な心理の状態を呈する (稲村, 1989) 大学生が顕在化し、「スチューデント・アパシー」という名称も一般化した。前研究 (諸井・嶋田・田中・清家・俣野, 2009) では、無気力傾向尺度を作成し、女子大学生が抱く無気力傾向の基本的構造の解明を試みた。主成分分析により 8 主成分が抽出された (「卒業後進路の明確さ」, 「授業に対する出席意欲の欠如」, 「授業に対する集中力の欠如」, 「対人関係動機づけの低下」, 「勉強外での意欲」, 「日常的疲労感」, 「相談相手の存在」, 「自信の欠如」)。これらの側面は、2 次主成分分析により、《学業意欲の欠如》, 《大学外部での意欲》, 《対人関係不全》に集約された。

本研究の目的は、前研究 (諸井ら, 2009) で認められた無気力傾向の構造について、新たにデータを収集して再検討することである。これは、本報告では省略するが、回答者の家族経験と無気力傾向を関連づける研究枠組みの一環として行われた。

同志社女子大学大学院生活科学研究科
生活デザイン専攻

*同志社女子大学生活科学部

項目それぞれがあてはまる程度を4点尺度で評定させた（「4. かなりあてはまる」～「1. ほとんどあてはまらない」）。なお、評定順の効果を相殺するために、評定用紙を頁単位（5頁）でランダムに並び替えた。

Ⅲ. 結 果

1 次因子分析

まず、無気力傾向尺度の項目水準での検討を行い、項目平均値の偏り（ $1.5 < m < 3.5$ ）と標準偏差値（ $SD > .60$ ）のチェックをし、不適切な項目を除去した。次に、残りの項目を対象に因子分析（主因子法〈 $k=3$ 〉）を行った。初期因子固有値 ≥ 1.000 を充たす解をすべて求め、適切な解を探索した。その際、①特定因子への負荷量が十分に大きく（ $\geq |.400|$ ）、②他因子への負荷が小さい（ $< |.400|$ ）という基準を設定した。各項目が単一の因子にのみ $|.400|$ 以上で負荷を示すように、項目を削除しながら、①と②の基準を充たすまで分析を反復した。明確な因子パターンが得られる解を採用した。

項目水準での検討の結果、4項目が不適切であった（ $m \approx 1.5$: apa_a_1, apa_a_10, apa_b_6, apa_b_9）。残りの46項目を対象に因子分析を行ったが、2～12因子解まで算出可能であった。項目内容と因子負荷のパターンを検討したところ7因子解が適切と判断された。分析を反復し、最終的な因子解を得た（Table 1）。

因子負荷が高い項目を見ると、前研究での8因子のうち「相談相手の存在」を除く因子がおおむね再現されたと判断できた。したがって、各因子を「Ⅰ. 卒業後進路の明確さ」、「Ⅱ. 授業に対する集中力の欠如」、「Ⅲ. 対人関係動機づけの低下」、「Ⅳ. 勉強外での意欲」、「Ⅴ. 授業に対する集中力の欠如」、「Ⅵ. 日常的疲労感」、「Ⅶ. 自信の欠如」と名づけた。前研究と細かく比較すると、2項目が前研究と異なっていた（「apa_b_2 勉強に関する本を読んでいても、すぐに飽きてしまう。」〈前研究「勉強外での意欲」→本研究「Ⅱ. 授業に対する集中力の欠如」〉、「apa_b_7 困ったとき、相談できる人がいる。」〈「相談相手の存在」→「Ⅲ. 対人関係動機づけの低下」〉）。しかし、この2項目の内容は本研究で同定した因子概念と一致すると判断できる。

下位尺度の構成

因子分析の結果に基づいて、各因子への負荷量を基準に（ $> |.400|$ ）に項目を選別し、下位尺度項目を構成した。なお、因子概念の方向に得点が高くなるように、逆

転項目の得点を調整した。下位尺度ごとに、1次元性の確認をし（①項目－全体相関分析、②主成分分析）、 α

Table 2 無気力傾向における下位尺度の検討

		相関 分析(a)	主成分負 荷量(b)
〔Ⅰ. 卒業後進路の明確さ〕			
	apa_a_5	.806	.889
	apa_b_8	.812	.892
	apa_c_4	.730	.833
	apa_e_6 *	.665	.784
	apa_c_8	.613	.737
		説明率	
$m = 2.32 (SD = 0.82) ; z = 1.653 p = .008 (c)$		$\alpha = .886$	68.76%
〔Ⅱ. 授業に対する集中力の欠如〕			
	apa_e_7 *	.468	.594
	apa_a_2 *	.562	.692
	apa_e_4	.554	.689
	apa_b_2	.514	.662
	apa_a_8	.559	.699
	apa_d_5	.504	.650
	apa_e_9	.325	.437
	apa_c_5	.431	.552
	apa_c_3 *	.390	.521
		説明率	
$m = 2.71 (0.53) ; z = 1.012 p = .258$		$\alpha = .788$	38.02%
〔Ⅲ. 対人関係動機づけの低下〕			
	apa_e_5 *	.567	.704
	apa_b_4	.675	.796
	apa_a_4	.624	.758
	apa_b_7 *	.482	.618
	apa_b_10	.502	.651
	apa_d_3	.503	.645
	apa_a_9	.478	.617
		説明率	
$m = 1.99 (SD = 0.59) ; z = 1.565 p = .015$		$\alpha = .808$	47.23%
〔Ⅳ. 勉強外での意欲〕			
	apa_d_2	.704	.892
	apa_c_6	.601	.837
	apa_e_2	.495	.745
		説明率	
$m = 2.73 (SD = 0.79) ; z = 1.518 p = .020$		$\alpha = .764$	68.36%
〔Ⅴ. 授業に対する出席意欲の欠如〕			
	apa_b_1	.633	.847
	apa_c_7 *	.655	.857
	apa_c_2	.589	.812
		説明率	
$m = 1.96 (SD = 0.83) ; z = 2.417 p = .001$		$\alpha = .780$	70.36%
〔Ⅵ. 日常的疲労感〕			
	apa_e_3	.608	.852
	apa_a_7	.579	.835
	apa_d_9 *	.414	.693
		説明率	
$m = 2.75 (SD = 0.83) ; z = 2.270 p = .001$		$\alpha = .711$	63.41%
〔Ⅶ. 自信の欠如〕			
	apa_c_10	.547	.830
	apa_e_8	.494	.789
	apa_c_1	.394	.694
		説明率	
$m = 3.07 (SD = 0.70) ; z = 2.193 p = .001$		$\alpha = .663$	59.80%

N = 256

* 逆転項目

- (a) 当該項目得点と当該項目を除く合計得点とのピアソン相関
(b) 主成分分析における未回転第Ⅰ主成分負荷量
(c) 正規性検定 (Kolmogorov-Smirnov の検定)

係数も算出した (Table 2)。「自信の欠如」の α 係数が .6 台であるが、①や②の結果から十分な同質性の水準にあると判断した。これらの項目の平均値を下位尺度得点とした。なお、各得点の分布の正規性も検討したところ、「授業に対する集中力の欠如」得点以外では正規分布からの逸脱が認められた。しかし、分布の極端な偏りはなかった。

これらの7個の下位尺度得点を対象に反復測定分散分析を行うと有意な効果が得られた ($F_{(4.32, 1101.35)} = 84.70$, $p = .001$)。さらに、多重比較を行うと (Bonferroni の調整), 「自信の欠如 > 日常的疲労感 \approx 勉強外での意欲 \approx 授業に対する集中力の欠如 > 卒業後進路の明確さ > 対人関係動機づけの低下 \approx 授業に対する出席意欲の欠如」($p = .001$) の傾向が検出された。

2 次主成分分析

無気力傾向の高次構造を探索するために、下位尺度得点を対象とした主成分分析 (プロマックス回転 $\langle k = 3 \rangle$) を試みた。この水準の分析では、主成分固有値 ≥ 1.000 を基準とした。

明確な主成分パターンを示す3主成分が得られた (Table 3)。第I主成分は、卒業後にすることや学業以外の対象への動機づけを示しており、《大学外部での意欲》と名づけた。対人関係の不全や自己評価の低下を表す第II主成分は、《対人関係不全》と命名した。第III主成分は、学生生活の本分ともいえる学業面での消極性を表しており、《学業意欲の欠如》と呼ぶことにした。

「授業に対する集中力の欠如」は、前研究では《学業

意欲の欠如》のほうに強く負荷していたが、今回の研究では《大学外部への意欲》に強く負荷していた。しかし、前研究の結果 (諸井ら, 2009, Table 2-a) を見ると、《大学学部での意欲》にも「-.472」の負荷を示していた。したがって、高次構造についても前研究とおおむね一致していると判断できよう。

IV. 考 察

本研究は、前研究 (諸井ら, 2009) で明らかにされた女子大学生における無気力傾向の基本的構造を再検討するとともに、無気力傾向を家族機能認知や父親や母親との接触状況 (諸井, 2007) と関連づけるために行われた。無気力傾向尺度に関する諸井ら (2009) の結果に基づいて測定項目を選抜して、新たに無気力傾向の測定を実施した。1次因子分析や2次主成分分析によると、前研究とおおむね類似した結果が得られた。

ところで、文部科学省 (2010) によれば、2010年4月の大学卒業者のうち「進学も就職もしていない者」は8万7千人 (5月1日現在) であり、前年度より1万9千人も増加している。とりわけ社会-経済的状況の影響に曝されやすい女子大学生にとっては (諸井, 2001), 「就職難」の状況は深刻である。彼女たちのほうが、大学生活での目標を喪失しやすい条件におかれているからである。もともと男子大学生に顕在的であった「スチューデント・アパシー」現象が、女性の大学進学率の上昇と日本社会の不況という中で女子大学生にも浸透する可能性がある。したがって、女子大学生が経験する無気力の基本的構造と心理-社会的な関連要因を明らかにすることは重要といえる。

ところで、杉本 (2009) は、居場所を「いつも生活している中で、特にいたいと感じ、実際にいられる場所」と定義し、中学生の居場所と心理学的適応との関係を検討した。その際、次の3種類の居場所を重要視した。①自分ひとりの居場所、②家族のいる居場所、③友だちのいる居場所。大学生活での無気力傾向は①や③の居場所環境不全感ともいえる。この不全感を②との関連で捉えることを本研究では主要目的としている。その点で、無気力傾向の基本的構造が2次構造を含め前研究 (諸井ら, 2009) とおおむね一致したことは、無気力傾向尺度による測定の安定性を示唆している。

無気力傾向に関するここでの結果を踏まえて、次の解析段階として、同時に測定してある回答者の家族経験が無気力傾向にどのように影響しているかを検討し、稿を

Table 3 無気力傾向に関する2次主成分分析 (プロマックス回転 $\langle k = 3 \rangle$) の結果—回転後の主成分負荷量—

	I	II	III
《大学外部での意欲》			
IV. 勉強外での意欲	.815	.044	.144
I. 卒業後進路の明確さ	.780	-.028	-.022
II. 授業に対する集中力の欠如	-.605	.123	.282
《対人関係不全》			
III. 対人関係動機づけの低下	.102	.862	.016
VII. 自信の欠如	-.260	.708	-.053
《学業意欲の欠如》			
V. 授業に対する出席意欲の欠如	-.089	-.299	.811
VI. 日常的疲労感	.103	.296	.756
[主成分間相関]	I	-.234	-.204
	II		.086

$N = 256$

初期固有値 > 1.052 ; 初期説明率 65.37%

改めて報告する。

〈付記〉

- (1) 本報告で分析対象としたデータは、第1著者の岸可奈子が修士論文研究のために立案・収集した研究の一部である。
- (2) データの統計的解析にあたって、PASW Statistics 18.0 for Windows を利用した。

V. 引用文献

- Erikson, E. H. 1959 *Psychological issues : Identity and the life cycle*. International University Press. 小此木啓吾訳編『自我同一性－アイデンティティとライフ・サイクル－』1973 誠信書房
- 稲村博 1989 『若者・アバシーの時代－急増する無気力とその背景－』日本放送出版協会
- Lewin, K. 1951 *Field theory in social science*. Harper & Brothers. 猪股佐登留訳『社会科学における場の理論』1956 誠信書房
- 文部科学省 2010 平成22年度学校基本調査の速報について http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa/01/kihon/kekka/k_detail/_icsFiles/afieldfile/2010/08/17/1296403_1_1.pdf
- 諸井克英 2001 彷徨するワーキング・ウーマン 諸井克英他著『彷徨するワーキング・ウーマン』北樹出版 11-33頁。
- 諸井克英 2007 家族機能認知とアダルト・チルドレン傾向 同志社女子大学学術研究年報, 58, 85-92.
- 諸井克英・嶋田若奈・田中康子・清家奈々・俣野由起子 2009 女子大学生の職業未決定傾向－大学生

活への意欲との関連－同志社女子大学生生活科学, 43, 1-10.

杉本希映 2009 『中学生の「居場所環境」における心理的機能に関する研究』風間書房

竹内洋 2003 『教養主義の没落－変わりゆくエリート学生文化－』中公新書

Appendix 1 無気力傾向尺度における残余項目

-
- apa_a_1 必修科目などの重要な授業にも、つい出る気がなくなって欠席してしまうことがある。
- apa_a_3 一つの課題に打ち込むことが出来ない。
- apa_a_6 すぐ、体がだるくなってしまう。
- apa_a_10 悩みを話せる人がいない。
- apa_b_3 自分の興味のある事柄さえ、あまりエネルギーをそそぐ気がしない。
- apa_b_5 目が疲れやすい。
- apa_b_6 大学内にいても、つい授業に出るのが面倒臭くなって欠席してしまうことがある。
- apa_b_9 生活のリズムが一定しないために、午前中の授業は欠席しがちである。
- apa_c_9 よく頭が痛くなる。
- apa_d_1 授業に出席するよりは自分の好きなことをやっている方がいいと思う。
- apa_d_4 授業中に、マンガを読んだり、落書きをすることが多い。
- apa_d_6 宿題を忘れることが多い。
- apa_d_7 目標に向かって、がんばっている。
- apa_d_8 一度決めたことでも人から言われると決心が変わりやすい。
- apa_d_10 授業中にいねむりしてしまうことが多い。
- apa_e_1 自分の夢が実現するとは思えない。
- apa_e_10 自分の部屋でひとりで本を読むことが好きだ。
-

(2010年11月30日受理)